

## 敦煌の歴史的背景

### 一 敦煌というところ

今ではトンコーといえど誰でも知っており、美しい石窟壁画やシルクロードを行く駱駝の姿を憶い浮かべるであろう。かようにトンコーが広く知られたのは、井上靖氏の名作小説『敦煌』(一九五九)以来のことである。その前は、松岡譲氏の『敦煌物語』(一九三八)等を通じて一部の読書家、仏教美術・シナ学・内陸アジア史に関心をもつ若干の人々を除いては、その名を識る者もなかった。

敦煌の地名は、中国の前漢武帝の時代に河西諸郡の西

### 池 田 温

端に敦煌郡が設置されて以来二千有余年、今日の中華人民共和国甘肅省酒泉地区敦煌県にまで受継がれている。

英文では Tunhuang 中国の標準ローマ字表記では Dunhuang と記され、七、十世紀の前後には火くわを付けて燉煌と書かれた。その位置は、現在の敦煌県城が東経九四度四八分、北緯四〇度一〇分、県城東南約二〇キロにある莫高窟はほぼ東経九五度、北緯四〇度に当り、緯度は日本の盛岡や秋田に近い。海拔千百以上の高原なので、空気は稀薄で紫外線が強い。そして何よりこの地を特徴づけているのは、土漠地帯に点在するオアシスであることと、同時に異常な乾燥地域に属す点である。砂漠とい

うより土漠・磧漠の語がピッタリする中国西辺内陸アジアの一角に立つと、湿潤なモンスーン圏に生活するわれわれ日本人とは、全く異質な世界なのだと思感させられる。雨は殆ど降らず年雨量十ミリ、降雨二、三回のことが多く、蒸発量が降水の三〇倍以上、内陸性気候で夏は熱く冬は零下二〇度にも降り、砂塵をまき上げる西からの烈風が吹き荒れる日が多い。

一九八〇年、秋山光和先生を団長とするグループに参加させていただいた筆者が敦煌を五日間訪れたのは九月の好季であった。生まれて始めて真の乾燥地帯を体験した筆者は、何となく鼻腔の異常を感じながら二、三日その理由に気付かなかつたが、やがて極端な乾燥による粘膜の反応とわかり、うっすら鼻内に滲み出た血液にも驚かなくなつた。朝限られた葉巻の水をコップに注いで口をゆすぎ、それを大地にこぼすと、ジュウツと音をたてて乾ききつた粉土が固まって褐色に色づく。しかし何分もすると又蒸発して跡かたもなくつてしまふ。毎朝戸外で口をすすぐたびに、水を吸い込む乾土の微妙なひびきが大地の蘇生の声のように思われたものである。

このような想像を絶するきびしい自然と闘って豊かなオアシスを築き上げて来たのが、敦煌の住民であった。南方にそびえる五千崙をこえる祁連山脈から流れ出す内陸の尻無川党河（唐代には甘泉水とよばれた）などから水渠を引き、或いは井水を汲上げて灌漑に努め耕地を造成する。漢代に華北平原東部から辺境防衛の兵卒に徵発され、或いは流亡の飢民や流刑の犯罪者等々として、はるばる千数百キロ以上も遠くこの地にやってきた人々の、屯田にはじまる敦煌の開発史は、当然無名の大衆の血と汗の結晶である。小麦をはじめトウモロコシ・キビ・アワ・綿花・ゴマ・瓜類などの島がひらけ、河西では肥沃をもつてきこえるこのオアシスも、文明の中心からは遙かに距たる内陸アジアの土漠（ゴビタン）中の一オアシスに変わりはない。

一番近い鉄道駅の柳園へも直線距離一三〇キロ以上距たっており、酒泉から安西を通る自動車道路が最要の交通路となっている。この辺地の小都市にも、世界に名だたる莫高窟のおかげで近数年来海外からも観光客が蟻集するようになり、県城にホテルも出来、更に飛行場を建

設中ときく。筆者らの参観した八〇年には宿泊設備として県招待所しかなく、酒泉飛行場から五時間以上バスにゆられ、安西に一泊してから二時間余バスでやっと千仏洞に到着したのを思うと感無量である。中国の飛躍的現代化の波の中で、敦煌も急速に近代都市に相貌を改めてゆくであろう。

## 二 諸族雑居の地

遊牧民月氏の天地であった甘肅の黄河以西の回廊地帯に北方から匈奴の勢力が加わり、それに対抗して武帝の積極政策により驃騎將軍霍去病が漢の大軍を率いて出撃し、匈奴の昆邪王を破って月氏の故地を始めて漢の勢力下に収めたのは、元狩二年（前一二二）のこととされ、やがてこの地方に河西・酒泉郡が置かれ、漢の西域進出への基地とされた。酒泉郡の管下にあった敦煌は、將軍李広利の大宛（フェルガナ）遠征（前一一〇—一〇一）の際兵站基地となり、第一回目に数万人、第二回目には吏將兵卒六万人とこれに私従する人々、又牛十萬頭・馬三萬余匹・驢騾象駝数万匹及び莫大な兵糧武器が集められ、

敦煌から出発した。かくて辺防と西域進出における敦煌の重要性が顕著となり、ついで命頭の屯田、そこへ至る交通路の確保、更に漢の大規模な使節団の頻繁な派遣とそれに対応する西域諸国からの使節団の来訪が伴ない、玉門関・陽関の両関門を扼す敦煌の地の辺疆の要衝としての役割はますますたかまつた。かくて酒泉郡から分れて独立の敦煌郡が設置されたのである。<sup>(1)</sup>

漢代に六県を管轄した敦煌郡の地は、唐代には大体沙州（敦煌郡）瓜州（晋昌郡）の兩州に当り、今日では敦煌・安西二県の範圍にほぼ重なっている。漢代は全国に約百郡、唐代は約三百州、そして今日は全国で二千二、三百県と二百市を擁しているのを通観するなら、巨視的にみれば敦煌の比重が漢で最も大きく、唐でやや減じ、現代は著しく軽微となつてることが明らかである。戸口数についてみると、前漢末に戸一萬一二〇〇、口三萬八三三と伝わり、唐の天寶時代に敦煌・晋昌兩郡合して戸七五六二、口三萬六〇九八と算えられ、現代は敦煌県人口約九万といふから、古代に比し今日人口は三倍以上に増加している。しかし全国平均に比べれば人口密度はかな

り稀薄であり、僻地たるを免れていない。

敦煌郡設置以後二千年の歴史を通じ、この地の住民の主体が漢族であった点は疑いない。しかし同時に漢族以外の少数民族の混住するものも相当の割合に達した点も看過してはならず、かかる住民構成の多様性こそ敦煌の重要な特色といわねばならない。既に古く六朝前期の『著旧記』(『統漢書』郡国志劉昭注所引)に、敦煌は「華戎交わる所の一都會(漢人と異民族のあつまりすむ町)なり」と特筆され、莫高窟の歴代壁画にもアリアン・チベット・トルコ系等諸外族とみなされる者が描かれていることは周知の通りである。

長い歴史を通じこの地を支配した政治的主権者についてみても、漢魏晉・前涼・西涼・隋唐・宋初・明初・民国以後等の漢族を除けば、前秦・後涼(以上氐族)、北涼(匈奴系)、北魏・西魏・北周(以上鮮卑族)、吐蕃(西藏族)、西夏(党項族)、元(蒙古族)、吐魯番(維吾爾族)、清(滿洲族)と非漢族の方が長期にわたっており、しかも一、二種ではなく多数の種族が交代している。もともと異民族王朝の支配といっても、支配者自体漢化する傾向を免れ

なかったから、本来の種族的要素がどの程度保持されているかは、個々の場合について具体的に検証認識する必要があるのはいうまでもない。地図を開いて見れば、現在の敦煌の町から西一〇〇キロほど行くと新疆維吾爾自治区の境に入り、南へは八〇キロ余で青海省境に達し、他方東北へ三〇〇キロで内蒙古自治区と接していることが一目瞭然である。すなわち敦煌の地は蔵・維・蒙諸族居住域のボーダーランドに属し、少数民族地帯に挿入された漢族オアシスルートの先端をなしているのである。

東アジアと中・西アを結ぶシルクロード上の要地であると同時に、モンゴリアと中ア・チベット更にインドをつなぐ南北ルートとの交会点をもなしており、多様な文化交流の焦点であった。今日敦煌県のすぐ南に肅北蒙古族自治県(蘆草溝)と阿克塞哈萨克族自治県があり相互に隣接している。オアシスの農耕の民と草原の牧畜の民が、互いに補い合って共生する状況は内陸アジア各地に見られるが、敦煌もその典型的実例を示すものである。十世紀の一敦煌文書には、龍家の何願徳が南山で商売するため、永安寺の僧長千から褐三段と白褐一段を借り、後に

戻ったら褐六段を返す(五割の利息)借用文言が見えている。龍部落・龍家とよばれる外族集団は河西各地に分居し、当時交通路の警衛などに大きな役割をこなっていたらしい。何願徳は連署している弟の何定徳とも全く中国式命名を示すから、起源は不明ながら漢化した商人である点は明らかであり、南方山岳地帯の牧民との交易に従事していたとみられる。八世紀の敦煌・吐魯番文書には、敦煌に定住したソグド人商人の聚落(徙化郷)や、敦煌・伊州・西州・安西(クチア)等を往来する興胡ソグド商人の活動を示すものが知られており、往時この城市の果した流通経済面での重要な役割をうかがうことができ

る。吐蕃のGos部落に生まれ、敦煌に来て仏教を学び梵・蔵・漢三語によく通じ、やがて吐蕃贊普に召されてチベット語への仏経翻訳に精励した後、河西におもむき敦煌や甘州で講説・仏典漢訳を進め、晩年は吐蕃を撃退して河西を再び唐朝の配下に復し帰義軍節度使に任ぜられた張義潮(？一八七二)を迎えられて、敦煌で弟子の漢人僧侶たちに瑜伽論等の講義を続け、八十歳近くで示寂した

吳法成(Gos chos-grub, 約七八〇—約八六〇)のごとき偉大な学僧の存在は、この地の国際的性格をよく象徴している。十世紀の敦煌の支配者であった帰義軍節度使曹氏一族は、トルコ系の甘州ウイグルやイラン系の于闐の王族と深く通婚関係によって結ばれていた。今も莫高窟六一窟の壁にから一族五十余名の供養像を見ることができ、中国人・中国文化を中核としつつも多様な外族・外来文化を吸収した敦煌の姿が如実にうかがわれるのである。

### 三 莫高窟と蔵経洞

辺陲の小都市敦煌が世人の注目をあびるのは、ひとえに大石窟莫高窟の造形芸術と、窟内の蔵経洞から発見された数万点の遺書・美術工芸品等の両群の文化財のためである。一九四〇年代からこの地に研究施設がおかれ、新中国になって格段の充実をみせ、今日では段文傑所長以下百名近い所員を擁する敦煌文物研究所が、その修理保護と研究のセンターとして目ざましい活動を展開している。

敦煌周辺には莫高窟の他西千仏洞・榆林窟（万仏峡）・水峡口の三石窟が遺存するが、その規模と遺存内容の総体からみて莫高窟が際立って重要性をもつ。莫高窟を歴史的に検討する際、先ず手掛りとなる文字記録は、第三三二窟に旧時建てられていたが、今日では一部残石を敦煌文物研究所に残すだけという李氏莫高窟仏龕碑（武周聖暦元年（六九八）に見出される。この碑は嘉慶年間（一八一三—二〇）に新疆へ流謫された徐松が莫高窟で原碑を見て『西域水道記』（一八二三）巻三に碑の表裏合せて二千二百余字を著録公刊して以来世にきこえ、清末の代表的金石学者葉昌熾は『語石』（一九〇九序）巻一・巻八で則天文字及び繁体数字の使用例に本碑を取上げて論じている他、羅振玉は『西陲石刻録』（一九一四序）に善拓に拠って全文載録しており、その後甘肅省文獻徵集委員會の校印になる『隴右金石錄』（一九四三）巻二には碑陽のみ著録されるから、当時すでに碑陰は磨滅していたのである<sup>(10)</sup>。その後莫高窟を詳考された石璋如・李永寧諸氏が<sup>(11)</sup>本碑全文を校録され、我々は容易にその本文に接することが<sup>(12)</sup>できる。

更に幸いなことに、藏経洞発見の写本（太上業報因縁經「卷三」残卷）の紙背に、本碑を抄録したものが王重民氏によって発見され、王氏と宿白・陳祚龍諸氏により碑文校定に活用され、その成果は李永寧氏録文にも受継がれている<sup>(13)</sup>。只この写本は首尾を欠き、一部に後筆の落書がある上、紙面にパリの国立図書館で補強のための絹が貼布されていてかなり読みにくいので、石刻乃至拓本の欠字を全面的に補うことを得ない。しかし幸運にも莫高窟の歴史を叙べた肝心の箇所はほぼ欠字なしにうめることができたのである。当該部分の原文は原碑の第一三—一五、一九—二〇行にわたり、

莫高窟者、厥闔秦建元二年<sup>(14)</sup>、有沙門樂僊、戒行清虛、執心恬靜。嘗杖錫林野、行至此山。忽見金光、狀有千仏。遂架空鑿<sup>(15)</sup>、造窟一龕。次有法良禪師、從東屈此、又於僊師窟側、更即營建。伽藍之起、濫觴於一僧。復有刺史建平公・東陽王等、各修一大窟。而<sup>(16)</sup>後合州黎庶、造作相仍。実神秀之幽巖、靈奇之淨域也。……（中略）……

爰自秦建元之<sup>(17)</sup>迄<sup>(18)</sup>大周聖曆之辰、樂僊法良發其

宗、建平東陽弘其迹。推甲子四百他歲、計窟室一千余龕。今見置僧徒、即為崇教寺也。君諱義、字克<sup>(20)</sup>讓、敦煌<sup>(19)</sup>人也。云々（左旁。を付した字は原石に欠け、写本で補ったもの）

の如く読める。即ち莫高窟の開鑿者として沙門樂僊、ついで法良禪師の両者、その年代を秦（前秦・苻秦）の建元二年（三六六）と明示するとともに、両僧の二龕の後に二人の刺史建平公と東陽王らにより夫々一大窟が營建され、やがて全州の庶民にまで造窟が普及し、本碑の武周聖暦元年（六九八）まで約四百年間に計一千余窟を算え、現在は僧達がここに住んで崇教寺となっている、と窟の歴史を概観しているのである。この李氏碑の叙述は、今日に至るまでの敦煌研究者の検証を通じ、概ね信憑性の高いものと認められている。例えば刺史の建平公は北周の保定・建德年間（五六五—七六）ごろ瓜州刺史に任じた于義に当り、第四二八窟がその造窟になる大窟と推定され<sup>(14)</sup>、又東陽王は北魏の宗室（明元帝の四世孫）で孝昌元年から西魏大統八年（五二五—四二）頃瓜州刺史であった元太榮と認められ、第二八五窟がその建造になるものと考

えられる<sup>(15)</sup>。かように碑文の史実性が裏書きされてくると、樂僊・法良に関する伝承も現地に残された貴重な証言と認定することが許されよう。徐松は、敦煌の長老趙吉から「乾隆癸卯（一七八三）莫高窟畔の沙中から（秦建元二年沙門樂僊立）と記した断碑が掘り出されたが、まもなく沙に埋没してしまった」という話を聞いたと記しており、道光十一年から十四年の間敦煌県令であった許乃毅も千仏巖歌の序文中に秀才趙吉に全く同じ話を聞いたことを叙べ、このことは蔣超伯『南澗樵語』巻一石仏条にも見えている。もしこの趙吉の言が事実なら、樂僊造窟の直接史料となるが、李氏碑中に「秦建元二年」及び「沙門樂僊」の全く同じ文字が含まれているので、本碑の記憶と何らかの混同があった可能性を否定しきれず、他の旁証が見出されぬ限り積極的に採用するのは躊躇される。

現存最古の窟は十六国時代末期、西涼、北涼の時代（五世紀前期）に属す二六七・二六八・二六九・二七〇・二七一・二七二・二七五の計七窟と認められており、それ以前四世紀のものは既に後世の造窟により壊され無く

なつてしまつたとみなされている。

なお莫高窟の起源に関しては、敦煌写本に別説が見え、「今時窟宇並已盡新。從永和八年癸丑歲（永和九年癸丑）三三三年）荆建窟、至今大漢乾祐二年己酉歲（九四九）、竿得伍伯玖拾陸年記。」とあるので、この『沙州城土鏡』なる地誌の伝える永和創建説をどう考えるべきか問題となる。『沙州城土鏡』の略抄本とおぼしきこの仏典紙背の記事は、五代後期のもので形式も整わず誤字も目立つ上、永和は江南の東晋の年号で、当時前涼の張重華の支配下にあつた敦煌では西晋の建興の元号を襲用しており、一般に信用できぬものとされる。『沙州城土鏡』の記事には、七世紀後半に編纂された『沙州図経』に由来するとみなされるものが多い。従つて永和創窟説も『沙州図経』に遡る可能性は否定できない。しかしこれには樂傳のばあいのように、抛るべき石刻の類が存した形跡はなく、恐らく隋唐代になつて東晋南朝を正系とする歴史意識が定着した段階で生まれた後出の憶説と推察され、かの著名な王羲之（蘭亭序）との連想などから、永和九年癸丑という年が持出されたのであろう。

ところで李氏碑は、徐松によると碑首に「大周李君修功德記」という八字の篆額が已に剝落すと伝わり、碑陽第一行には

大□□□□□□□□上柱圍李君莫高窟□龜碑并序  
首望宿衛上柱圍敦煌張大忠書 弟応制擧□□□□□□□□

とあつた如くである。羅氏『西陲石刻録』は首行を  
大□□□□□□□□和圃□柱圍李君莫高□□龜碑并序  
首望宿衛上柱圍燉煌張大忠書 弟応制擧□□□□□□□□  
に作り、『隴右金石録』の張維注に引く旧拓本は

□□□□□□□□□□柱圍李君修慈悲仏龜碑并序□□□□□□□□□□  
首望宿衛柱圍敦煌張大忠書

に作つており、相互に異同がある。毎行五〇字の本碑規格を前提に、最も古く原碑を写し著録した徐松の記録を尊重し、諸他拓本による羅・張等の録文を参照すると、原文は左の様であつたと復原されよう。

大□□□□□□□□校尉上柱圍李君莫高窟□龜碑并序  
首望宿衛上柱圍燉煌張大忠書 弟応制擧□□□□□□□□□□  
□字

碑陰末行下段に「造碑僧寥廓 上柱圍鐫字索洪亮」とあるので、本碑の製作は僧寥廓が当り、上柱圍索洪亮が刻字した訳で、首行の弟某は文の撰者とみなされよう。李義の弟は本碑陰に刻された者が懐節・懐忠・懐恩・懐操と四名に上るから、応制擧とあるのはその中のいずれかである。

李氏仏龕碑につぐ莫高窟の重要資料は、周知の「莫高窟記」である。これは第一五六窟（張議潮窟）前室北壁に、左から右に向け全十一行墨書されているが、現在では剝落がひどく読みとれぬ文字が少なくない。しかし幸い敦煌写本に抄録したものが王重民氏によつて紹介され、全文を知ることができる。一五六窟題記は、謝稚柳・史岩兩氏の録文が公刊されているが、共に一九四三年頃実見されたものにもかかわらず随分異同が多く、その読みにくさを印象付ける。左に窟記の字配りに準じて原文を掲げ、剝落箇所は写本によつて補い以下の検討にそなえる。（右券（ ）は写本の異字）

- 1 莫高窟記
- 2 右在州東南廿五里三危山西。秦建元之世、有沙
- 3 門樂傳、杖錫西遊至此。遍礼其山、見金光如千仏
- 4 之状、遂架空鑿巖、大造龕象。次有法良禪師東來、
- 5 多諸神異。復於傳師窟側、又造一龕。加藍之建、肇于
- 6 二僧。晋司空索靖、題壁号仙巖寺。自茲已後、鑿造不絶、
- 7 可有五百余龕。又至延載二年、禪師靈隱、與居士陰祖等、
- 8 大象、高一百卅尺。又開元年中、僧処諺與鄉人馬思忠等、
- 9 大象、高一百廿尺。開皇年中、僧善喜建講堂。從初量窟、至
- 10 三年戊申、即四百四年。又至今大唐庚午、即四百九十六年。

写本「莫高窟記」は決して精鈔でなく、五代時期に仏典紙背にメモされたものであり、直接間接一五六窟題記に由来する点は疑いなく、文字の異同はルーズな転写に際し偶然生じたものとみられる。大唐庚午は大中四年（八五〇）で吐蕃を追払い河西が唐に帰した記念すべき年であり、咸通六年（八六五）は張議潮窟が成り著名な出行

図等が完成し莫高窟記が題書された年次とみられる。大曆三年をどうして記録しているのか詳らかでないが、安史の大乱後唐の勢力が河西・西域より退潮して吐蕃の進出を許し、河西節度使も永泰二年（大曆元年 七六六）、涼州から沙州敦煌に遷った事実<sup>(23)</sup>を考慮すると、この時点で莫高窟に新節度楊休明による銘記が施され、記念すべき年とされていたのであろう。

莫高窟記の楽傳・法良創龕に関する記事は李氏碑のそれを承けているのが明瞭である。但だ索靖題壁は李碑に見えず、楽傳の在世より数十年遡る話だけに後出の伝説と察せられる。仙巖の呼称は唐代住民にも殊に好まれ、仙巖を名のる者も一、二にとどまらぬ程であった。八世紀初の敦煌の地方官の手で張芝（敦煌出身の後漢の草書の名人の臨池遺跡が搜索顕彰された事実<sup>(25)</sup>と考え合せると、当時敦煌の生んだ最著名人で能書の誉高い索靖にまつわる莫高窟題壁の伝承が喧伝されたのも推察にかたくな。武周時代の北大像と開元年間の南大像造頭の記事は重要なもので、今日でもこの兩大像は莫高窟の目玉といえる。後に節度孔目官兼御史中丞の肩書をもつ楊洞芋

復原する作業は藤枝晃・賀世哲・孫修身・史金波・劉玉権氏らの労作で推進され、既にアウトラインを見通せるようになった。

莫高窟の重要性を格段に昂めているのが、藏経洞に封藏されていた膨大な敦煌文献である。内陸アジアの乾燥地帯で前世紀以来発見された古文獻は夥しく、歴史・言語・文学・宗教をはじめ、広大なユーラシアを対象とする新たな学問領域の進展を促してきた。それら新出資料の中で敦煌文献は、まず数万点という莫大な量と、四十一世紀初に亘る古さと年代の拡がり、更に多様な言語を含み、しかも千年近く封藏されていたので長巻・冊子の原型をとどめる諸点において、主として寺院や城居遺址或いは墳墓から発掘され、殆ど断巻零葉しかとどめぬ他地発見資料群とは異なる格段の豊富さを誇っている。

これらが封藏されていたのは、莫高窟北端に近い第十六窟の北壁に附設された小耳洞十七窟で、普通藏経洞と呼ばれている。四畳半たらずのこの小室は、北壁の高さ半分の台上に高さ九四センチの値洪辯の塑坐像をすえ、その奥壁に両樹をはさんで尼と侍女が立っている絵が描かれ、

（一）作（孝）が撰した『瓜沙兩郡編年記』にも開元九年（七二一）にかけて、「僧処該、鄉人百姓馬思忠等とともに、発心して南大像弥勒を造る、高さ一百廿尺。」の記事があり、大像は弥勒と呼ばれている。しかし巨像造像が華嚴経等の説く毘盧舍那仏信仰の流行を反映して武后時代から目立っており、敦煌の兩大像もそれに連なるものと解されよう。奈良東大寺大仏とも石塑と鑄銅の違いこそあれ、その造頭の理念には共通の背景が存したのであり、龍門の大仏を介して、東西辺疆にまで波及した宗教と造形のモニユメントをこの目で確かめることができるのである。南大像の鎮座する一三〇窟では、一九六五年壁画補強工事に際し、南壁西端の底層壁画の下に岩孔内から、開元十三年七月十四日の康優婆姨の患眼平癒を祈る願文をもつ幡が発掘され、本窟開鑿が開元に遡る点が確認された。<sup>(27)</sup>北南兩大仏に象徴される莫高窟のピークを過ぎると、造窟関係の記録は却って数多く残っており、九世紀後半張氏帰義軍節度使時代に再興の気運を示し、なお十世紀の曹氏帰義軍時代、西夏時代と残暉を留めている。当代造窟を文獻・銘記を手掛りに編年し莫高窟の歴史を

西壁の龕に大中五年（八五二）洪誓告身勅牒碑がはめこまれている。すなわちこの耳洞は京城内外臨壇供奉大德兼釈門河西都僧統撰沙州僧政法律三学教主賜紫沙門の榮職にあった敦煌の高僧洪辯の影窟（肖像を安置する記念室）であった。<sup>(28)</sup>十六窟とその上の三六五窟も、共に呉洪辯の指導下で九世紀中葉建造されたもので、壁面は西夏時代に重繪されたが、構造は中唐の原形を伝える。十七窟の洞口（高一丈半、幅半丈）が封じこめられたのは、十一世紀前半節度使曹宗寿の時代であったと考えられている。<sup>(29)</sup>当時すでに洪辯寂後百数十年を経てその業績も忘れられ、子孫にこの影窟を守護する者も絶えたのであろう。

ここに堆積されたものは、漢文写経をはじめとし布絹の幡幢や印仏・画幅に至るまで概ね仏寺に属す諸法具で、寺院の経蔵や文書庫から、古くなって傷んだり不要になったりして退蔵されるに至ったものである。従って敦煌の数寺の旧蔵にかかる写本の大蔵経が見出された（三界寺藏経・報恩寺藏経等の捺印を有する）が、どれも一、二巻かせいぜい数十巻の端本であり、一部取換えて廃棄された残本とみられる。仏典以外の儒家・道家の写本や官庁文

書の残巻等もあるが、いずれも寺院で廢紙として二次利用されたものを主とし、さもなくば断片的夾雜物にすぎない。かように敦煌文献は、我國の古社寺に伝世された經典文書と根本的に異なり、最も保存の要ある貴重品を原則的に含まぬ所に、その本質を有する。しかしその為却って普通では後世に伝わらぬ日常資料を豊富に我々に与えてくれる。それをいかに活用し人間生活の過去の真相を解明するかは、我々に委ねられた課題である。

#### 四 造窟にかかわる人々

莫高窟記や李氏碑にみられる如く、莫高窟の歴史に最もかかわりのあるのは

四世紀 楽傳・法良

六世紀 東陽王・建平公 善喜

七世紀 靈隱・陰祖 李義

八世紀 処診・馬思忠

のように仏僧と地方長官と在地有力者の三者である。九世紀の洪辯や張議潮・張淮深ら節度使、十世紀の曹議金・曹元忠ら節度使をはじめとする造窟者をもみても同様

である。そして前期では僧も地方長官も外来者を主とし、後期ではすべて土着者となる点が目立っている。敦煌文書のおかげで造形と文字資料を総合して考察できるのは、大体五〜十世紀間に限られるが、八世紀末に吐蕃の占領下に陥って以後は、帰義軍時代に中原に遣使しその正朔を奉じていたとはいえ、節度使を世襲し自ら王を称したことさえあり、基本的に独立した地方政権であった。従って北魏や隋唐時代に中原文化とさして落差のなかった敦煌も、中唐以降は中国内地と概して隔絶された辺土となるのを免れなかった。九・十世紀の敦煌で貨幣が殆ど使われず、布帛や穀物を取引の媒介に使う実物經濟に退化したのはその顕著なあらわれである。敦煌写本に含まれる中国内地から齎されたものの比率も、盛唐以前に比し中唐以降でかなり小さくなり、曆も中原と異なる地方曆を用いたので、月朔干支や置閏が内地とずれることがしばしばあった。<sup>(34)</sup>

敦煌効穀の人である曹氏は漢初の功臣曹參の裔を称し、雍州から隴西や敦煌へと拡がったもので、全に至るまですでに五代仕官し二千石も生み出す有力氏族に成長していたことを伝える。これによれば二世紀には敦煌にも既に豪族といえる氏族が存在したわけで、続く魏の時代に「大姓雄張」といわれ<sup>(35)</sup>『三國志魏書』倉慈伝)、唐代にも「豪族士流、家々自足」<sup>(36)</sup>『沙州図経』卷三)とうたわれる基礎が築かれていた。殊に永嘉の乱以後華北が五胡の混乱時代に陥ると、河西の地は相対的安定地帯となり中原から逃れてこの地に來住する土族も少なくなかった。敦煌の生んだ著名人は三、四世紀に集中しており、混血の訳僧僧竺法護(敦煌菩薩)や將軍で能筆の誉高い索靖はその代表であった。五世紀の敦煌の学者劉昞は『敦煌実録』を著わしこの地の人物の逸話を多く録したが、これ

を読んだ盛唐の歴史家劉知幾は、西辺の敦煌に人材の多いのに感嘆の言を發している。<sup>(36)</sup>五世紀初にこの地を本拠とする十六国の一の西涼政権が発足し得たのも、かかる地域社会の充実、有力氏族の成長が前提をなしていた。それだけに西涼を併合した武威の北涼政権が五世紀中葉

北魏の軍門に降り、河西の有力者文化人が多く代都へ遷されるに及んで、敦煌の名族も衰退過程に入った。しかしなお数百年にわたってオアシス社会の代表者の地位を占めたのは、敦煌の有力氏族であった。かれら大姓相互間には通婚が頻繁に行なわれ、氏族社会ともいふべき上層集団が形成され、政治・經濟・文化の各般にわたって常に地域社会のイニシアティブをとっていたのである。

敦煌文書に現れる住民は姓名のわかる者が一万人を越えるが、その姓の分布をみると、興味深いことに敦煌名族の大姓と同じ者の占める比重が大きい。名族筆頭の張氏は、全住民の約十五%を占め、索・王・李・李・汜・陰・安・曹・宋・令狐諸氏を加えた計十姓では、実に全人口の六割近くに達する。土肥義和氏が八世紀末〜十一世紀初の敦煌住民一万余人について調査された所によると、全体で姓の種類は約一五〇種にも達するにもかかわらず、下位百姓の人口を合計しても全体の八%弱にすぎず、張氏一姓の約半分にすぎない。<sup>(37)</sup>又外族の胡姓に属する者の比率は全住民の一割を超え、名前が漢風でなく胡名を称する者は稀で、胡姓の數%にすぎない。従って

七、八世紀にソグド人の聚住した従化郷の如き特別なコロニーを除けば、居住外族の漢化が相当進んでいたと判断してよい。さて李氏碑の書者張大忠は自ら「首望」と特筆しているが、これは望族(名族)筆頭を意味する。窟主李氏は西涼の王室李暠の裔を称し、唐の帝室隴西李氏と同族に属すこととなる。李氏一族は特に莫高窟と縁が深く、義(懷讓)の弟の孫李太賓は一四八窟に大曆一四年(七七六)の修功德記碑(背面に太賓の曾孫明振の再修功德碑を刻す)を持つ。李明振は帰義軍節度使張議潮の娘と結婚しており、九世紀にあっても最高権力層グループに属した。しかし十世紀になるとその子孫で特に顕れた者は見出しがたい。確実に七、八世代たどれるこの李氏の例は敦煌では稀有に属し、節度使張氏・曹氏の家系すら五、六世代を知り得るにすぎぬ。すなわち名族にあっても確実な系譜伝承は十二世紀に限られており、遠祖や移住の祖との結びつきは多く曖昧である。この点は多数の同姓者の中から成上った者が誰でも郡望を称し、名人の裔を宣伝する一般的背景の当然の結果である。北大像を造る主動者となった陰祖は、〈敦煌名族志〉残巻によると

「隋唐已来、尤も望族と為る。」と特筆されており、父祖の名も伝わらず七世紀以降急速に抬頭したことを知る。かように名族社会の伝統の千年も続いた敦煌でも、個々の家についてみれば大きな社会変動の波にもまわっていた。

敦煌出身者の任官、経歴を通観すると、軍事にかかわる武官が圧倒的に多い。屯田に始まるこの西辺のオアシスは、実に帝国の西のまもりの一拠点であり、敦煌住民に課されたのも重い兵役・労役の負担であった。この地が戦場となったことも少なくなく、住民の生活は終始外族の侵寇に脅かされていたといつて過言でない。石窟の中に丹誠こめて造顕された浄土は、かれらの日常の不安と苦難を一瞬忘れさせる役割をもっていたとみられる。

権力者・名族以外の住民も、グループを作つて社による造窟に努め、来世への願望を形に表す活動に参加した。帰義軍時代には壁画製作を担当する画師の組織(画行)やそれを管轄する(画院使)も設けられていた。<sup>(38)</sup>敦煌住民は殆ど誰でも莫高窟と相当のかかわりをもつており、石窟は地域社会の縮図といえるほどである。

## 五 敦煌研究の進展

今世紀初、藏経洞に封閉されていた敦煌文献等が世に知られ、スタイン、ペリオ等の外国への持出しにより世界に衝撃を与えてから数年間に敦煌研究の草創期とする、その後二回の大戦を経たり、資料の散在が組織的研究の発展を妨げた為、その進行は遅々としていた。それが戦後一九六〇年前後に、敦煌研究は飛躍的進展を示した。この時期に敦煌写本の基本目録―ジャイルズ目録(一九五七)・ラウヴァレ・プサン目録(一九六二)・ラルー目録(第三巻、一九六一)・メンシコフ目録(一九六三・六七)が相ついで公刊され、王重民編『敦煌遺書総目索引』(一九六二)により漢文写本のほぼ全容に見通しを付け得るようになった。

更に榎一雄先生らの骨折りで大英博物館のスタイン敦煌漢文文献既整理分全部のマイクロ撮影が一九五三・四年に完成、研究者の利用に供されるようになり、多数の研究者が日常的に写真を活用できるに至った。同時に王

重民他編『敦煌変文集』(一九五七)、王重民『敦煌古籍叙録』(一九五八)の如き敦煌資料のまとまった集録や解題も提供され、広汎な研究者が各方面から容易にこれを利用しうるようになったのである。

他方石窟そのものの研究では、一九四四年に敦煌芸術研究所が設けられ、新中国になって敦煌文物研究所と改称、格段の充実をみせ、補修や調査、模写やレプリカ作製を中心に困難な作業を推進し、六十年代以降組織的に壁画・塑像の撮影・編年・系統づけを進め、更に窟内銘記や敦煌遺書中の関係資料の蒐録に努め、造形作品と文献記事の総合による石窟の歴史再構成と芸術展開の追及に着実な歩みをたどった。ところが六十年代後半から文化大革命の波に洗われ、十年動乱の時代は宗教文化全体が否定排撃されて、研究所の存立自体すら一時危まれるほどであった。それが文革収束以後、學術研究の春が訪れ、再生の熱意にもえる関係者の多年の蓄積が一気に奔流のように溢れ出した。豊富なカラー図版と研究を含む敦煌文物研究所編『中国石窟敦煌莫高窟』一―五(一九八〇―八二)刊行はそのめばしい成果といえよう。本書には数



名の日本の研究者（長広敏雄・秋山光和・岡崎敬氏他）も協力しており、印刷面では平凡社との合作になる。同時に海外でも、パリのギメ博物館所蔵のペリオ将来品について、ペリオ石窟調査ノート（註22）参照、全六巻予定、最近までに四巻出たと（註）公刊や幡幢・布絹画の詳細な解説目録と図録が刊行され、又ロンドンの大英博物館のスタン将来絵画類についてもロデリック・ウィットフィールド氏の大著が上野アキ女史の訳で刊行中である。かように八〇年代になって敦煌の壁画と布絹画が全面的に精良な色彩図版と研究を伴って公刊され、研究の新紀元を迎えることとなった。本特集に変相画が各方面から多角的に検討されるに至ったのも、かかる数年來の研究の高潮を前提としている。

近年における敦煌研究のたかまりを最も強く印象づけるのは関係定期刊行物の簇出である。敦煌關係の最初の逐刊『敦煌学』が潘重規氏らの手で香港で創刊されたのは一九七四年のこと、同誌は今日まで台北に発行地を変えて八輯（一九八四）まで継続刊行され、台湾地区の中国人研究者を主体に文学や伝統的文献学・通俗宗教文献

の追求に力を入れ、海外からの寄稿も少なくない。敦煌學關係の中文論考のビブリオグラフィは網羅に近づいており、参考価値に富む。一九八〇年には甘肅省蘭州の蘭州大学から敦煌学研究組の編になる『敦煌学輯刊』が蘭州大学々報の一環として刊行され、大体年刊で六輯（一九八四）まで出ている。執筆者は蘭大スタッフに限らず、敦煌文物研究所や国内各大学・博物館・研究所等の専家にわたり、歴史を中心に各分野の研究を収める。更に八二年には敦煌文物研究所の手で『敦煌研究』試刊一期が出刊され、石窟芸術研究中核に多くの論考をのせ、第三回目から正式に『敦煌研究』（一九八三）として公刊された。その他蘭州大編の『西北史地』中亜学会編の『中亜学刊』等の雑誌にも敦煌学にかかわる論文が出るのはいうまでもない。わが国でも『月刊シルクロード』『季刊東西交渉』『ユーラシア（新）』等の雑誌があるが、仲々永続せず、敦煌研究の専門誌は未だ現れない。ただ種々の雑誌の敦煌關係特集号に見るべきものがままたたは周知のとおりである。敦煌学の逐刊と並んで大規模な研究集会の開催も注目をひく。一九七九年十月、パリでペ

リオ生誕百年記念として、（五）十一世紀の中央アジアの写本と石刻をテーマとする国際集會が開かれ、世界各地における資料蒐蔵や整理研究状況が報告されるとともに、中国学・チベット学・古代トルコ学の廿数篇の研究発表があり、一九八一年 Journal Asiatique の特集号として會議紀要が公刊された。<sup>(46)</sup>一九八三年は、二月にパリでセンジェー・ポリニャク財団主催になる仏・中西国学者による敦煌壁画と写本のシンポジウムがあり、その紀要が最近刊行された。<sup>(47)</sup>同年八月には蘭州で中国敦煌吐魯番学会成立大会及び全国敦煌學術討論會が舉行され、百五十名の参加者を集め、百十五篇の報告が読まれた。その主要内容は二冊の論文集として近刊が予告されており、敦煌文物研究所からは『敦煌研究』の同學術討論會特刊<sup>(48)</sup>が出ており、参加者の年令とステイタスを左のように統計表示している。

年令	参加人数	百分率
三四歳以下	六人	四 %
三五～五五歳	九四人	六二・七 %
五六歳以上	五〇人	三三・三 %

職名	人数	百分率
教授・研究員・研究館員	三四人	二二・六 %
副教授・副研究員・副研究館員	三八人	二五・四 %
講師・助理研究員・館員	七二人	四八 %
助教・研究実習員	六人	四 %

又提出論文百十五篇の内容は左の如く分布している。

石窟と考古	一六篇	地理	五篇
美術	一四篇	遺書	一八篇
舞蹈音楽	一三篇	語言文学	二二篇
歴史	一四篇	綜述	一三篇
芸術	四〇人	文学	一三人
文物考古	二三人	語言文字	五人
歴史	三九人	宗教	六人
民族学	一〇人	経済	三人
文献学	一〇人	科学技術	一人

造形研究者と文献研究者が相半ばしており、比較的高齢者が多い。又芸術と文学研究が盛んで、他宗教に関する研究者と報告が頗る乏しい点も特徴的といえよう。いずれにせよ、かくも多数の關係研究者を擁する中国で、全

領域を総合する学会が結成され、北京（遺書研究）・蘭州（敦煌研究）・烏魯木齊（吐魯番研究）の三センターを中心に敦煌文物研究所・国家文物局古文獻研究室・北京大学中古史研究中心・武漢大学魏晉南北朝隋唐史研究室等の関係機関と密接に提携して敦煌研究が積極的に推進される事態を迎えたことは、特筆に値する。まさに八〇年代は敦煌研究が空前の隆盛期を迎えたと称して過言でないであろう。そこでは「敦煌吐魯番学会」と、吐魯番研究が併称される点は留意されるべく、両者が車の両輪のように相補い相助けることよって、一層の展開が期待されているのである。さて同じ八三年八月末から九月初にかけては、東京・京都で第三一回国際アジア・北アフリカ人文科学会議が開かれ、その敦煌・吐魯番研究セミナーでも日本人を主に十数名の報告がなされ、翌年レジユメを載せる議事録が刊行された。<sup>(49)</sup> かような学界の活気は凝って幾多の論文集を生み出しつつある。敦煌文物研究所編『敦煌研究文集』（甘肅人民出版社、一九八二）、<sup>(50)</sup> 北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』（中華書房、一九八二）（二）（北京大学、一九八三）、<sup>(51)</sup> 武

漢大学魏晉南北朝隋唐史研究室編『敦煌吐魯番文書初探』（武漢大学、一九八三）、<sup>(52)</sup> 絲綢之路考察隊編『絲路訪古』（甘肅人民出版社、一九八三）、<sup>(53)</sup> パリの敦煌研究グループ（E.R.A.四三八、主任ミシェル・スワミエ教授）による『敦煌研究論集』『新敦煌研究論集』（一九七九、八二）『敦煌研究論集』（三）（パリ極東学院、一九八四）<sup>(54)</sup> 等はその顕著なものであり、敦煌研究についてみれば、造形研究と文獻研究の総合をめざす傾向が全体に強まるとともに、中国では吐魯番文書研究の深化を契機に社会経済史や法制・制度史の研究が急速に進み、フランスではその学問の伝統を反映して宗教文化の追及が深まっている。パリのペリオ蒐集全部のマイクロが完成し、八〇年前後に中国・日本等で閲覧利用が可能になったことも、写本・文書研究の画期的前進を支えた。今や敦煌写本で写真の取られぬのは殆どレニングラード本のみとなり、それについても遅まきながらチユグイエーフスキー氏の労作第一巻が刊行をみた。<sup>(55)</sup>

他方では資料そのものの影印も拡まり、道教写本をほぼ網羅した大淵忍爾氏の労作や、周祖謨氏による韻書の

彙集<sup>(57)</sup>、書道の見地からパリ敦煌本の尤品を選び饒宗頤氏の解説を附して刊行中の『敦煌書法叢刊』<sup>(58)</sup>、或いは所蔵地別に敦煌資料全部を縮印刊行しようとする膨大な『敦煌宝蔵』<sup>(59)</sup>等、枚挙に遑ない。大淵氏の書は詳細な目録及び現行本との対校等とセットをなし、敦煌道経類の重要な基礎研究であり、周氏の集成も多年の研究成果たる考釈を附している。また山本達郎先生を中心に編纂中の『敦煌吐魯番社会経済史資料シリーズ』<sup>(60)</sup>も、資料の影印と録文・解説をセットとするもので、今後この種の資料集が研究の進展につれて続々編纂刊行されるであろう。敦煌研究の展開に呼応して導論の類が幾つも現れ、他

さて以上近年における敦煌研究のめざましい展開を一瞥してきたが、そこで強く印象に残るのは中国における研究体制の整備と、研究活動の空前の盛況である。一九三〇年代には、「敦煌は吾国學術の傷心史なり」と嘆ぜられたのが、新中国の成立後「昔日の莫高窟は、豺狼の鬼狐と友なりしが、今日の莫高窟は、美麗なること画図の如し」とうたわれ、今日その黄金時代を迎えようとしている。海外でもパリの研究グループの作業が、編目<sup>(61)</sup>に論文集・研究書の刊行にめざましい成果を示しつつある。今後当分の間、われわれは新刊の応接に寧日ない嬉しい悲鳴が続きそうである。

註

方では包括的な講座も計画された。<sup>(62)</sup> その外いわゆるシルクロードブームに乗って、日本では夥しい関係出版物が見られたが、学術的に価値あるものは概して少数の専門書で、両者の乖離は容易に埋められぬままである。スペースの制約もあり、チベット文を始めとする少数民族語資料については殆ど触れられなかったが、現在印刷中の山口瑞鳳編『講座敦煌6敦煌胡語文獻』は、邦語の参考書として学界の渴を癒すものとなる。

(1) 敦煌郡の設置年代は、『漢書』卷六武帝紀に「(元鼎)六年(B.C.一一一)……武威・酒泉の地を分つて張掖・敦煌を置き、民を徙して以てこれを実す。」同書卷二八下地理志下敦煌郡条に「武帝の後元年(B.C.八八)、酒泉を分つて置く。」と二様に伝えられ、今日まで種々議論されてきたがなお定論を見ない。比較的よく採用されているのは太始・征和の交(B.C.九三〜九二)とする日比野丈夫氏の説(『河西四郡の成立について』『東方学報』二五、一九五四、「漢の西方発展と両関開設の時期について」)

て『東方学報』二七、一九五七。共に同著『中国歴史地理研究』所収、同朋舎、一九七七）である。榎一雄「漢魏時代の敦煌」『講座敦煌2 敦煌の歴史』大東出版社、一九八〇、二二頁以下参照。古代敦煌の歴史を概観した近作では、宿白「西漢魏晉南北朝時代の敦煌」『丝路訪古』収、一九八三が要を得ている。

- (2) 『漢書』卷二八下地理志下敦煌郡条。
- (3) 『通典』卷一七四州郡四、古雍州下、晋昌郡（瓜州）条に『戸一千一百六十七、口三千八百六十四』、燉煌郡（沙州）条に『戸六千三百九十五、口三万二千二百三十四』と伝える。

- (4) 金岡照光「敦煌の現状—一九七九年五月」『講座敦煌1 敦煌の自然と現状』一九八〇、八〇頁。なお民国時代一九四一年の甘肅各県戸口調査報告では敦煌県人口は二万七〇五一人であったという（蘇瑩輝『増訂再版敦煌学概要』国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八一、七一—八頁）。この数字が現実を正確に反映したものなら、新中国になって敦煌の人口は空前の増加を示したことになる。なお敦煌の人口の変遷については、斉陳駿「敦煌沿革与人口」『同統』（蘭州大学々報一九八〇—二、敦煌学轉刊二、一九八二）参照。

- (5) 『後漢書』志第三郡国五、敦煌郡条。国は乾位に当り、地は良墟に列す。水に懸泉の神あり、山に鳴沙の異あり、川に蛇虺なく沢に兕虎なし。華・戎交わる所の一

都會也。

- (6) 大英図書館所蔵スタイン將來敦煌漢文文獻S四四四五(1)。
- (7) 拙稿「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」ユーラシア文化研究1、一九六五参照。
- (8) 吳其昱「大蕃国大徳・三藏法師・法成伝考」（福井文雅・樋口勝共訳）『講座敦煌7 敦煌と中国仏教』一九八四参照。
- (9) 森安孝夫「ウイグルと敦煌」『講座敦煌2 敦煌の歴史』三二二頁以下参照。
- (10) 陳万里『西行日記』北京撰社、一九二六、九二頁には、一九二一年白系ロシア人により本碑が破壊され二つに割れていたという。
- (11) 石璋如「敦煌千仏洞遺碑及其相関的石窟考」中央研究院歴史語言研究所集刊三四上冊、一九六二、三八—四二頁。

- (12) 李永寧「敦煌莫高窟碑文録及有關問題(一) 敦煌研究一、一九八二、五六—六一頁。

- (13) パリ国立図書館所蔵ペリオ將來敦煌漢文文獻P二五五—一背。王重民氏の校訂文は、李永寧氏によって依拠された旨李氏論文に明記されているが、まとまった形で公表されなかったらしく、近刊の王重民『敦煌遺書論文集』中華書局、一九八四にも収められていない。陳祚龍「敦煌学新記、(一) 關於莫高窟的「大周李義碑」」幼獅学誌一

四一—、一九七七、又同著『敦煌文物隨筆』台湾商務印

- (14) 宿白、同(13)論文四〇八—四一〇頁。施萍亭「建平公与莫高窟」『敦煌研究文集』甘肅人民出版社、一九八二、一四四—一五〇頁。

- (15) 李永寧、同(12)論文、六二頁。但し宿白氏、同(13)論文は東陽王窟を二六三・二六五・二四六の三窟のいずれかとされる。東陽王元榮については、羽田亨「敦煌千佛洞の营造に就きて」歴史と地理二〇—二、一九二七、『羽田博士史学論文集』上巻取、一九五七。趙萬里「魏宗室東陽王榮与敦煌写経」中徳学誌五一—三、一九四三。藤枝晃『The Tunhuang Manuscripts, A general description, Part II, Zinbun 10, 一九六九』二七—二九頁等参照。

(16) 許乃毅『瑞考軒詩鈔』卷四。

- (17) 蘇瑩輝氏は、前秦柴倕碑の所伝を武周李君修仏龕碑の誤伝と断定されている（前掲註(4) 同書二三四頁）が、推測にとどまり裏付けの証拠を示されていない。

- (18) P二六九—一背。P. Pelliot 羽田亨共編『敦煌遺書活字本』第一集、上海東亞研究會、一九二六、一頁。饒宗頤『敦煌書法叢刊』一八卷碑金(一)、一九八三、八一—四頁、

九九—一〇一頁、饒氏は刑字を扞とよむ。

- (19) 拙稿「沙州圖経略考」『榎博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社、一九七五、五一頁以下。

- (20) P三三七—三〇背(一)、王重民「莫高窟記(敦煌史料之一)」歴史研究一九五四—二、同著『敦煌遺書論文集』中華書店、一九八四、三二—三三頁。

- (21) 謝稚柳『敦煌藝術叙録』古典文学出版社、一九五七、四〇二頁。

- (22) 史岩「敦煌石室画像題識」(一九四五自序、一九四七常書鴻序)『美術叢書』第五集第七輯、藝文印書館、一九七五、九六—九五頁。

なお一九〇八年ポール・ペリオ隊の莫高窟調査ノートが、近年ギメ博物館のヴァンディエ・ニコラ夫人、モニク・メヤール女史等の整理をへて公刊中で、その中にも「莫高窟記」録文が含まれており、参照に値する。

- (23) 『新唐書』卷六十七方鎮表四、河西節度使条、『資治通鑑』卷二二四唐紀四十、代宗大曆元年夏五月条。
- (24) S五四三、唐大曆年代(C七七二)燉煌縣差科簿稿第五〇行に馬仙巖(ハセ)、ソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支所蔵敦煌文書一三七九号に鄧仙巖の名が見える。

- (25) 『沙州圖經』卷三(P二〇〇五)三四〇—三六五行、張芝墨池条。
- (26) P三七二、S五六九三。陳旂龍「敦煌寫本『瓜沙古事繫年並序』箋正」大陸雜誌二二—二二、一九六〇。柴新江「瓜沙古事繫年」及其成書年代」敦煌吐魯番學文獻研究論集二、一九八三、六六〇—七〇頁。
- (27) 潘玉閔・蔡偉堂「敦煌莫高窟第一三〇窟窟前遺址發掘報告」敦煌研究第一期、敦煌文物研究所、一九八二年、二二六頁。
- (28) 藤枝晃「敦煌千佛洞の中興」東方學報三五、一九六四。張氏諸窟を中心とした九世紀の仏窟造営という副題をもつこの労作は、文献と造形を総合的に追求する莫高窟研究に一時期を画す貢献を齎した。この機会に同論文七八—八〇頁に載せる張淮深造窟記轉本について、近年利用できるようになったマイクロ焼付により録文を補訂し、利用者の参照に資する。1行□↓再、2行之□↓共奏、3行言忽↓五稔、5行□↓萬、9行到↓劫、10行敵↓敷、14行膽↓躋、16行若↓宏、□↓翹擇、19行臂↓舒、23行窟↓蓋、24行接↓積疊、25行□於東□、□↓卓於東終、截斷、墻↓落、26行和↓扣、□↓鋼、字↓竿、27行拔↓狀、28行標↓換、31行□↓初、32行□↓步、33行拜□↓塑裝、捨↓擠、□、□↓體、掛□、38行聖跡↓聖、39行金↓舍、40行□↓菴、43行之□、…↓梵釋之天、來供妙果、塞↓塞、44行□↓滿、45行路↓駱、□□□
- (29) 賀世哲・孫修身「瓜沙曹氏与敦煌莫高窟」敦煌研究文集、甘肅人民出版社、一九八二、二二〇—二七二頁。
- (30) 史金波・白濱「莫高窟榆林窟西夏文題記研究」考古學報一九八二—三。
- (31) 劉玉權「敦煌莫高窟、安西榆林窟西夏洞窟分期」敦煌研究文集二七三—三一八頁。
- (32) 馬世長「關於敦煌藏經洞的幾個問題」文物一九七八—二、二〇—三三、二〇頁。
- (33) 閻文儒「莫高窟的創建与藏經洞的開鑿及其封閉」文物一九八〇—六、六一—二頁。藤枝晃、Reconstruction de la «Bibliothèque» de Touen-Houang. JA CCLXX, 1981, p. 65—68. 「敦煌藏經洞是何時封閉的」光明日報一九八四年十二月十六日2頁。
- (34) 王重民「敦煌本曆日之研究」東方雜誌三四—九、一九三七。藤枝晃「敦煌曆日譜」東方學報四五、一九七三。
- (35) 曹全碑は西安碑林にあり、「金石萃編」卷一八以下著録文献は多い。
- (36) 「史通」卷一八別伝に「磊落たる英才、粲然として矚に盈つ」と叙べる。
- (37) 土肥義和「婦義軍(唐後期・五代・宋初)時代」講座敦煌2敦煌の歴史二五三—八頁。
- (38) 莫高窟造窟者に關しては土肥義和、同(37)論考二七七—

- ↓茲寶貨、46行□↓假、度↓慶、…↓福已報、47行繰↓絲、事↓司、48行…↓柔容美德。
- (29) 莫高窟第二九〇窟の仏伝故事画 樊錦詩・馬世長
- キシル第一一〇窟の仏伝壁画 丁明克
- 莫高窟附近的兩座宋塔 蕭默
- 《涼州御山石仏瑞像因縁記》考釈 孫修身・党寿山
- 東千仏洞調査簡記 張伯元
- 河西節度使覆滅的前夕 史華湘
- 吐蕃王朝管轄沙州前後 史華湘
- 本所藏《酒帳》研究 施萍亭
- 釈、肥没忽 李正宇
- 本所藏《文選・運命論》殘卷介紹 李永寧
- 《方角書一首》試析 梁梁
- 《敦煌廿咏》写作年代初探 馬德
- 莫高窟壁画、彩塑無機顏料的X射線分析報告 徐位業・周国信・李雲鶴
- 敦煌学与西域文明文献研究目錄(二) 閻万鈞・戚志芬
- バーミヤン石窟 樋口隆康(劉永増訳)
- (43) 本誌は蘭州大学内に編集部があり一九八一年から季刊で刊行され、二年間試刊をへて一九八三年第一期(総八期)から公刊となった。
- (44) 中国中亜文化研究協会編(主編馬雍氏)で一九八三年十二月第一輯が中華書局から刊行された。
- (45) 「月刊シルクロード」は一九七五年九月創刊、七卷二号(通卷五六号)(一九八二年二月)で停刊。「ユーラシア」は一九七一年創刊、七三年九号で停刊、同新一号
- (25) 『沙州圖經』卷三(P二〇〇五)三四〇—三六五行、張芝墨池条。
- (26) P三七二、S五六九三。陳旂龍「敦煌寫本『瓜沙古事繫年並序』箋正」大陸雜誌二二—二二、一九六〇。柴新江「瓜沙古事繫年」及其成書年代」敦煌吐魯番學文獻研究論集二、一九八三、六六〇—七〇頁。
- (27) 潘玉閔・蔡偉堂「敦煌莫高窟第一三〇窟窟前遺址發掘報告」敦煌研究第一期、敦煌文物研究所、一九八二年、二二六頁。
- (28) 藤枝晃「敦煌千佛洞の中興」東方學報三五、一九六四。張氏諸窟を中心とした九世紀の仏窟造営という副題をもつこの労作は、文献と造形を総合的に追求する莫高窟研究に一時期を画す貢献を齎した。この機会に同論文七八—八〇頁に載せる張淮深造窟記轉本について、近年利用できるようになったマイクロ焼付により録文を補訂し、利用者の参照に資する。1行□↓再、2行之□↓共奏、3行言忽↓五稔、5行□↓萬、9行到↓劫、10行敵↓敷、14行膽↓躋、16行若↓宏、□↓翹擇、19行臂↓舒、23行窟↓蓋、24行接↓積疊、25行□於東□、□↓卓於東終、截斷、墻↓落、26行和↓扣、□↓鋼、字↓竿、27行拔↓狀、28行標↓換、31行□↓初、32行□↓步、33行拜□↓塑裝、捨↓擠、□、□↓體、掛□、38行聖跡↓聖、39行金↓舍、40行□↓菴、43行之□、…↓梵釋之天、來供妙果、塞↓塞、44行□↓滿、45行路↓駱、□□□
- (29) 賀世哲・孫修身「瓜沙曹氏与敦煌莫高窟」敦煌研究文集、甘肅人民出版社、一九八二、二二〇—二七二頁。
- (30) 史金波・白濱「莫高窟榆林窟西夏文題記研究」考古學報一九八二—三。
- (31) 劉玉權「敦煌莫高窟、安西榆林窟西夏洞窟分期」敦煌研究文集二七三—三一八頁。
- (32) 馬世長「關於敦煌藏經洞的幾個問題」文物一九七八—二、二〇—三三、二〇頁。
- (33) 閻文儒「莫高窟的創建与藏經洞的開鑿及其封閉」文物一九八〇—六、六一—二頁。藤枝晃、Reconstruction de la «Bibliothèque» de Touen-Houang. JA CCLXX, 1981, p. 65—68. 「敦煌藏經洞是何時封閉的」光明日報一九八四年十二月十六日2頁。
- (34) 王重民「敦煌本曆日之研究」東方雜誌三四—九、一九三七。藤枝晃「敦煌曆日譜」東方學報四五、一九七三。
- (35) 曹全碑は西安碑林にあり、「金石萃編」卷一八以下著録文献は多い。
- (36) 「史通」卷一八別伝に「磊落たる英才、粲然として矚に盈つ」と叙べる。
- (37) 土肥義和「婦義軍(唐後期・五代・宋初)時代」講座敦煌2敦煌の歴史二五三—八頁。
- (38) 莫高窟造窟者に關しては土肥義和、同(37)論考二七七—
- (39) 姜伯勤「敦煌的『画行』与『画院』」敦煌吐魯番學會(一九八三)論文集(印刷中)。
- (40) Mission Paul Pelliot: Documents archéologiques conservés au Musée Guimet, Touen-Houang, t. XIV—XV, Bannières et Peintures, catalogue descriptif et Planches. 1974, 1976. など一連のXII(様式及び画像学的研究)XVI(銘文と色紙型題記)二冊が続刊予定。
- (41) British Museum 監修、Roderic Whitfield 編集解説、上野アキ訳『西域美術大英博物館スタイン・コレクション』敦煌絵画I・II、講談社、一九八二。第三巻続刊予定。
- (42) 創刊号(総第三期)の主要目次を参考にあげると、略論莫高窟第二四九窟壁画内容和芸術 段文傑  
中晚唐の石窟芸術 閻文儒  
莫高窟隋代圖案初探 閻友惠  
莫高窟仏教史迹画介紹(四) 孫修身

(一九八二年一月)二号(一九八五年一月)で休刊。「季刊東西交渉」(井草出版)は一九八二年三月創刊、本年三月に四卷一号(通巻一三三号)がでし続刊中。

(46) *Journal Asiatique*, T. CCLXIX, Numéro Spécial, *Actes du Colloque international (Paris, 2-4 octobre 1979). Manuscripts et inscriptions de Haute Asie du Ve au XIe siècle*. 1981, 406 pp.

(47) *Les peintures murales et les manuscrits de Dunhuang. Colloque franco-chinois organisé par la Fondation Singer-Polignac à Paris, 21-23 février 1983. Editions de la Fondation Singer-Polignac, Paris, 1984, 152 pp.* その目次を訳すと左のようになります。

運命論写本断巻の撮合  
敦煌写本の壁画銘記  
敦煌壁画の技法及び石窟と作品の保護  
印沙仏と千仏捺印  
敦煌における雛(おどやぶり)の諸相

ダニエル・エリアスベルク  
侯錦郎

ジャン・ロベール・ドゥレージュ

(劉薩訶、伝承と図像  
洞淵神呪経の構成  
敦煌ウィグール写本概観  
アイ・カヌームと中ア・西北インドにおける  
レニズムの伝播

ポール・ベルナル  
エレンヌ・ヴェネチ  
左景権  
ジェイムス・ハミルトン  
ポール・マニヤン  
郭麗英  
施萍亭  
史華湘  
段文傑

(48) 「敦煌研究一九八三年全国敦煌學術討論會特刊」一九八四年五月、二五頁。會議の写真一〇頁と特約評論員による「承前啓後 繼往開來」(會議の概観要約)一九頁及び一一五頁の論文目録を含む。

(49) *Proceedings of the thirty-first International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa. Tokyo-Kyoto 31 August-7 September 1983, 2 Vols. Tokyo 1984, vol. II, pp. 973-1002, Seminar A-IV, Tun-Huang and Turfan Studies.*

(50) 『敦煌研究文集』甘肅人民出版社、一九八二。本書については筆者の簡単な紹介(季刊東西交渉一一四、一九八

二、三二一四頁)参照。

(51) 北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』中華書房、一九八二、六八六頁。その目次を大略示すと、

敦煌写本跋文(四篇) 王重民遺稿  
燉煌文書学(漢文篇) 發凡 左景権  
敦煌写本書儀考(之一) 周一良  
唐天宝敦煌差科簿研究 王永興  
吐蕃飛鳥使与吐蕃駅伝制度 張広達  
關於唐宋初于闐國的国号、年号及其王家世系問題 張広達・榮新江  
敦煌写本常何墓碑校釈 鄭必俊  
唐永泰元年—大曆元年河西巡撫使判集(伯二九四二)研究 安家瑤  
敦煌県博物館藏地志殘卷—敦博第五八号卷子研究之一 馬世長  
地志中的「本」和唐代公廩本錢—同右二 馬世長  
敦煌県博物館藏星圖・占雲氣書殘卷—同右三 馬世長  
敦煌写本諷諫今上破鮮于叔明令狐峒等請試僧尼及不許交易書考釈 陳英  
敦煌吐魯番發現唐写本律及律疏殘卷研究 劉俊文  
為肅州刺史劉臣璧答南蕃書(伯二五五五)校釈 鄧小楠

唐開元廿四年岐州郿県尉判集(伯二九七九号)研究 薄小瑩・馬小紅

敦煌写本唐僖宗中和五年三月車駕還京師大赦詔校釈 蔡治淮  
伯希和三七一四号背面伝馬坊文書研究 盧向前  
『同書』第二輯、北京大学出版社、一九八三年、六七四頁、その目次の大略は、

記敦煌写本的仏経 王重民遺稿  
敦煌学之文書研究 姜亮夫  
新博本吐火羅語A(焉耆語)《弥勒会见記劇本》四頁釈 季羨林  
《新集天下姓望氏族譜》考釈 王仲華  
記吐魯番出土急就篇注 周祖謨  
法国所藏燉煌漢文文書新目釈例 左景権  
敦煌四件唐写本姓望氏族譜(?)殘卷研究 唐耕耦  
試論勾官—唐代官制研究之一 王永興  
上海藏本敦煌所出河西支度營田使文書研究 姜伯勤  
馬社研究—伯三八九九号背面馬社文書介紹 盧向前  
莫高窟壁画上的玻璃器皿 安家瑤  
高昌官府文書雜考 祝總斌  
吐魯番出土泥德達告身校釈 王永興・李志生  
吐魯番發現唐写本律疏殘卷研究 劉俊文  
吐魯番出土的兩份唐代法制文書略釈 許福謙

吐魯番阿斯塔那二二五号墓出土的部分文書の研究―兼論吐谷渾余部 齊 東方

敦煌遺書論文集序 周一良

《大正新修大藏經》第八十五卷―旧刊新評―《敦煌文學發凡》之一章 左 景 權

(52) 武漢大學歷史系魏晉南北朝隋唐史研究室編著『敦煌吐魯番文書初探』武漢大學出版社、一九八三。本書には十七篇のすぐれた論文を収めるが殆んど吐魯番文書研究に

関わり、敦煌研究は朱雷「敦煌所出《唐沙州某市時佃簿口馬行時沽》考」と陳國燦「唐代的民間借貸―吐魯番敦煌等地所出唐代借貸契券初探」の両篇にとどまる。

(53) 『絲綢之路考察隊編著『絲路訪古』甘肅人民出版社、一九八三、三二三頁。主要目次は

- 絲綢之路―中外人民友誼和文化交流的歷史見証(代序) 吳 堅
- 西漢魏晉南北朝時期的敦煌 宿 白
- 古代河西の興衰 齊 陳 駿
- 從居延漢簡看內蒙額濟納旗的古代社會經濟狀況 高 敏
- 漢唐間絲綢之路上的絲綢貿易 劉 曼 春
- 唐代前期對河隴地區的經營及其效果 陸 慶 夫
- 河西的犁 傅 政

呂光西征 蔣 福 珏

唐高宗和武則天時期安西四鎮的廢置問題 吳 宗 國

鄯善與鄯善國 楊 宗 檀

興平清梵寺 孫 浮 生

大般涅槃經在河西的伝釈 胡 守 為

武威青嘴喇嘛灣出土大唐武氏墓志補考 周 偉 州

敦煌石窟《臘八燃燈分配窟龕名數》寫作時代考 孫 修 身

吐魯番出土唐代契券文書述略 沙 知

七十年来我國敦煌研究文獻目錄 王 永 興

河西懷古 寧 可

絲路記游 劉恩惠・閻守誠・姚蜀平

考察紀程 鄧文寬・劉曼春・胡載

(54) Contributions aux études sur Touen-Houang. Librairie Droz, 1979, 167 pp. Pl. XXXVI. Nouvelles contributions aux études de Touen-Houang. Librairie Droz, 1981, 329 pp. Pl. XLIV. 後者の目次を大略訳出すると

- 八世紀の敦煌 L・I・チェグイエーフスキー
- 仏説東流伝の古本 ポール・マニヤン
- 仏説生経断卷(P二九六三) 左 景 權
- 劉薩訶と莫高窟 エレヌ・ヴェチ
- 敦煌龍興寺資財録(P三三四三)研究 侯 錦 郎
- 壁画銘記集(P三三〇四背) シェル・スワヒエ
- 三七二四と五六〇三二) エレヌ・ヴェチ
- 敦煌の旋風装 ジャン・ピエール・ドゥワレージュ
- 敦煌写本による印沙仏の祭儀 侯 錦 郎
- 敦煌における大薩の諸相 ダニエル・エリアスベルク
- 敦煌写本の五姓占 キャロル・モルガン
- 漢文中宗三篇短論による知的経験の超越 ポール・マニヤン

太上靈宝老子化胡妙经(S二〇八一)―六朝の仏教的道

教研究への一寄与 アンナ・ザイデル

(55) Л. И. Чурыевский: Кириллические Документы из Дуньхуана. Вып I, 1983, Москва, Издательство "Наука". 560 стр. 本書はソ連科学アカデミー東洋学研究所

レニングラード支所蔵敦煌漢文写本(少数の吐魯番写本

等を含む)中、社会経済関係文書類を集録、図版・録文・

露訳・注釈・解説を含む全四冊シリーズの第一巻で、籍

帳・土地文書・寺院経済文書等を含む。

(56) 大淵忍爾『敦煌道経 目錄編 図録編』二冊、福武書

店、一九七八・七九。四一頁、図版九〇四頁。

(57) 周祖謨『唐五代韻書集存』上・下二冊、中華書局、一九八三。一〇二二頁、附表二二三頁。

(58) 饒宗頤編集解說『敦煌書法叢刊』全三九冊予定、二玄社、一九八三。既刊十五冊、全体の構成は拓本・韻書・經史(一)・書儀・牒狀(一)・詩詞・變文・碑金(一)・(一)・写経(一)・(二)・道書(一)・(二)となっており、約一五〇点

- を蒐載。解説は林宏作氏により和訳されている。
- (59) 黄永武編『敦煌宝蔵』新文豊出版公司、一九八一、全一五〇冊の予定で既刊一二〇冊、ロンドン・北京本部分完成。
- (60) Tunhuang and Turfan documents concerning social and economic history. I Legal Texts. (A) Introduction & Texts. (B) Plates. Toyo Bunko, 1978, 80, 128 pp. Pl. 106 pp. 本書は山本達郎・岡野誠両氏と筆者の共編、IIは籍帳を内容とし山本達郎・土肥義和両氏共編で印刷中、IIIは券契を対象に山本氏と筆者が編集中心であるが、他に蘇聲輝『増訂再版敦煌学概要』国立編訳館中華叢書編審委員会、一九八一、四二七頁、陳祚龍『敦煌学要論』新文豊出版公司、一九八二、藤枝晃『敦煌学導論』(南開大学歴史系講稿)一九八一、九二頁附録八頁等もある。
- (61) 『講座敦煌』大東出版社、一九八〇。既刊は榎一雄編『敦煌の自然と現状』、『敦煌の歴史』、池田温編『敦煌の社会』、編集委員編『敦煌と中国道教』、牧田諦亮・福井文雅編『敦煌と中国仏教』、篠原寿雄・田中良昭編『敦煌仏典と禪』以上六冊。
- (62) 陳寅恪『敦煌劫余録序』陳垣編『敦煌劫余録』一九三〇 卷首、又中央研究院歴史語言研究所集刊一―二収。
- (63) 閻文儒『莫高窟行』中の句。吳云『閻文儒伝記』中
- 国当代社会科学家』第六輯、書目文獻出版社、一九八四、九二頁。
- (65) *Catalogue des manuscrits chinois de Touen-Houang*. III, Nos. 3001-3500. Edition de la Fondation Singer-Polignac, 1983, 482 pp. 本目の第一冊はジャンク・シホルネ、吳其昱両氏の共編で二〇〇―二五〇〇号を含み、一九七〇年刊行された。第二、四冊以下も印刷乃至編集中心。
- (66) 代表的著作として Paul Demiéville: *L'oeuvre de Wang le zélateur suite des Instructions domestiques de T'aiou, Poèmes populaires des T'ang (VIII-Xe siècle)*. Collège de France, Institut des Hautes Etudes Chinoises, 1982, 887 pp. が挙げられよう。張錫厚『王梵志詩校輯』中華書局、一九八三、三八二頁と併せて敦煌通俗文学に対する東西研究者の関心と研究の現状の一端をうかがうことができる。文学方面は特に研究が密集しており、潘重規氏の『敦煌变文集新書』上・下二冊、康橋出版事業公司、一九八四や、川口久雄編集解説『敦煌資料と日本文学』一―四(破魔変・四獣因縁、敦煌壁画絵解き銘文集、大目乾連冥間救母变文、于闐国和尚阿弥陀経講経文)大東文化大学東洋研究所、一九八三―四をはじめ数多く枚挙にたえない。

(いけだ おん・東京大学教授)